

手をつなぐとも

等友

S60・10・1生



〒111-0041

台東区元浅草

2-10-17

03-3841-2844

浄土真宗

勝龍山

等覚寺

住職

朝倉 馨

平成19年9月

89号

一歩又一歩
歩いて行く
心の中
あみだ様とご一緒
に

おさな児の様に
すぐ感動して
ニコニコと
にびくたつた心を
仏様の前で
なむあみだぶつと
合掌する

番



人間失格

私達の浄土真宗の用祖

親鸞聖人

様ほど自分言われた方はいらぬ
とハツキリ言われた方はいらぬ
と思ひます

ご著書の「一念多念文意」の中に

「凡夫というは無明煩惱わらわらみ
にみちて、欲もおお、いかり、は
うだち、せねみ、ねたむころはお
く、ひまなくして、臨終の一念にいた
るまでとどまらず、きえず、たえず
しとさうけ出していられます。」

無明煩惱が身に充滿して、

この私の事をさすのでなく、ご自身

をさうけ出していられます。

一念多念文意の外、ご著書の至る

処に「極悪深重」

「一生造悪」と

いうお言葉が隠面もなく出て参りま

だからこそ阿彌陀如来様の「たす
けんとおぼしめしたちきる本體をい
唯ひたすう、かたじけなくいただけ
る身になられ、大安心を得られたの
だと存じます。

我々は中々わが身の人間失格・人間
落第と反省出来にくい様です。

私はいつも思ひ上つて人間合格と厚
顔を重ねていきます。

人間失格に気付いたら親うん様を思ひ
そして、あみだ様の前に赤面しつて、
又ヨロヨロと合掌念仏し立直らせて
頂き日々を送りませう。

その様を私をあみだ様が優しく浄
土に迎えて下さいます。



宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌
真宗本願兩堂等御修復惣志金 御依頼書

東京2組 等 覺 寺 殿

◎ 総御依頼額 (2003年度～2011年度)
金 2,792,800 円 (A)

◎ 2007年度 御 依 頼 額
金 310,400 円
※ 「御修復額」+1(年度)

「御遠忌・御修復惣志金」 貴寺 既納金額
金 2,792,800 円 (B)

総御依頼額に対する残額
金 0 円
※ (A) - (B)

真宗大本願 東京教務所



御 依 頼 書

東京2組 等 覺 寺 殿

◎ 2007年度 宗 門 護 持 金
金 791,500 円
A B C D E
F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

◎ 2007年度 宗 費 賦 課 金
金 119,500 円

◎ 2007年度 御 修 復 賦 課 金
金 54,750 円

◎ 2007年度 教 区 費
金 110,300 円

◎ 2007年度 真宗会館宮構積立拠出金
金 15,000 円

合 計 1,091,050 円

真宗大本願 東京教務所



東京教区 東本願寺真宗会館役宅宅
建 築 拠 出 金 御依頼書

東京2組 等 覺 寺 殿

◎ 総御依頼額 (2007年度～2009年度)
金 77,200 円 (A)

◎ 2007年度 御 依 頼 額
金 25,800 円
※ 「御依頼額」+1(年度)

「建築拠出金」 貴寺 既納金額
金 0 円 (B)

総御依頼額に対する残額
金 77,200 円
※ (A) - (B)

真宗大本願 東京教務所



東京教区 宗祖親鸞聖人七百五十回
御 遠 忌 志 御依頼書

東京2組 等 覺 寺 殿

◎ 総御依頼額 (2007年度～2011年度)
金 226,700 円 (A)

◎ 2007年度 御 依 頼 額
金 45,400 円
※ 「御依頼額」+5(年度)

「御遠忌志」 貴寺 既納金額
金 0 円 (B)

総御依頼額に対する残額
金 226,700 円
※ (A) - (B)

真宗大本願 東京教務所



ご法名

ご本心より「ご法名は今后たの様に統一致します。」との通達がありました。

今迄はご法名の下に、信士、信女とおつけしておりました。が、今後は釋尼。・・・・・女性の場合は釋尼。・・・・・とすることと指示されました。

但し院号法名は各菩提寺との関係もあり、おつけしてもよいとの事です。

わが真宗の南祖親王様は、自分頭の悪い、何も分らない者がであるといへり下り、愚弄釋教と云えられた。その様な事を今更協議決定され

たもと思ひます。どうぞ住職が親手に変更したものでない事をご諒承下さい。

御寄付

一 金 八千円也

一 金 五千円也

一 金 西田九次様

一 金 杉山香津子様

皆様より又等友にお志を頂きまして。有難くお礼を申し上げます。

より一層努力して内容の充実と楽しい等友にしたいと努力致します。

どうぞ怪々なうおに身辺の雑事、旅の思いを、などなどご投稿下さい。

ます様に。

「ありがとう」ごめん下さい
素直に「いえるかた」



よいお嫁さん

まだまだ子供だ、子供だと思つて
いた外孫の二人に、今度結婚しま
すと告げられ、一々もあ、お目度う
しと云うと、一々今迄有難うと
だきつかれました。
びつくりしました。



年齢をとつて、
事を忘れ、周囲
の人の加齢を忘
れ、恥しい事だ
す。
良寛さんは、
親しい人から嫁
に行つてから
心得を聞かせて
ほれいと頼まれ
た時、

一つ、ふらつらとせぬこと
二つ、親を大事にすること
三つ、おだ口を慎むこと
四つ、料理をよく学ぶこと
五つ、生命あるすべてに情をかけ
ることに
共に学ばより、教養を、それは胸
にしまつてしけらさぬ事。
人生は毎日が勉強、卒業証書は？
ざれ唱に
たんと長持軽く、よいが
笑顔持て来る嫁がよいが
嫁をいたわり粗末にするな
かわいと我が子もよその嫁
若い嫁でも目がたてば
わが嫁の仲間入り
身が廻りの製品次々進々
です、が優しい笑顔は家中を明るく
和やかにし、近も新しいのぞく
と笑顔で一家を包んで下さる。
と、どう

幸せ者

母の中には色々な幸せを感じてい
られる方があります。
お金があつて幸せ、地位があつ
て幸せ、一家仲よく幸せ、考える
と幸せつて随分ありますね。

でも
こんな話を思い出しました。
一休さんが冬の夕方浮浪者が寒そ
うにしているのを見ま、着ていた綿
入れを脱ぎ与えました。着ていた綿
入れは早達とれを着て、知らん顔
をしてお前さん、物を貰つる有難いと
思わんのかしら、あんなは施して

一和尚さん、あんたは施して
姉レいと思わぬのかしら
一オオ、やうな一休さんとも云つて立去つ
つたとか、

人に施したら「有難う」といへ相
好ものだ、とこちりの心が汚れてる
のですね。

私は人間様に恵まれ、いつもその
幸せをかみしめ幸せさに包まれ、ど
うしてもこの様は幸せを頂けたのかと
合掌していただきます。
心積整がで温かひお檀家様の皆様
にがこまれたの毎日、お礼心をこめ
てのご清要。

私と青木さんとの出会い、そして
ご縁戚に有る宮原様、大南様、(宮原
様や大南様の事は次号に書かせて頂
きます。)

海軍、鷹として召集され静岡集の
焼津兵舎に、南方に行く迄、訓練の
毎日、

寒い二月の毎日、ただたう広い空地
の向うの方に殺風景な瓦太作りの共
同トイレ、当番さんは早く起きて清
掃し、皆の獲ている兵舎に向つて、

つかわやよろしと大騒ぎで報告し
兵舎の外、寒風の吹く処で真すぐに立
うつくします。
広い通路の両側にゴロ寝していた
皆はソレツとばかりに、かわやに向
つま一目散。
私もだたつ広い兵舎を出た処に立
つかわい、少年兵にかわい相になり
「寒いのに、苦勞さん」とぬぎらい
とお礼の言葉を残して戻す。
そんな一言が少年兵の青木孝君と
私を結びつける縁となりました。
南方のサツパ島では最年少の青木
兵は隊長の従兵、自分は本部付の主
計兵として隣り合わせの兵舎、気楽
に顔を合わせ、互に助け合いました。
主計と云つても呑気な記録係。
そこの青木さんとは「義兄弟にな
ろう。生死は一緒だよ」と誓い合
ました。
色々あり互に助け合いつつ、終戦を
迎え、十二月廿五日青木兵は隊長と

共に日本に帰国。私は主計兵として
兵杖の名簿、数、残つた現金の記録
等々を、風土病をこわがつつ上陸せ
た、湾内に止めた艦の中にいるサー
ツと司令官の処に届けに。
兵杖は上陸上昇艇で沖に運び、ザ
ーツと。あー誰かの名又も海のモウ
ズ！
それならと面倒な小銭等の他も夜
そつと海中に。
胸の痛む、涙の出る一幕ぞした。
やがて翌年三月、私も陸軍の残兵
さん達と横須賀に。
青木さんは先きに復員してからの
毎日、当寺に来られ終日先代住持を
弔母の様に仕え、下さつたときぎ
涙の出る程有難い思いをされました。
私帰還後も毎日兄弟の様に近果へ
食料の買出その他は之切れません。
世情落着き、寺行事は手先して手
伝い、やがて私が「等友」を發行し
ますと、広田總代と三人で綴りみ。

報恩譜

折つて机を重しに、封筒入れ大変な
ご苦勞をかけました。真徹院さんは
今は本堂、法名前に真徹院さんは
ハラハラしながら見まいられます。
私も毎日何かと話しかけています
その外に現在お檀家さんの大團圓
さん、青木さんのご親戚の宮原兄弟
さんは次号に書かせて頂きます。
勿論七くはられた木屋林実之助様
を始め、私さとりまくお檀家様が
故が皆兄弟、姉妹の様を明るげず、
優しさで生きるとお手本を示して下さ
います。

私の様な幸せに包まれた者も珍し
いのではないかとつい駄文を述べた
めしました。
がまんして次号もよんで下さい。

他人の幸せさ
他はこぶ
優しさ、あたたかき。

台風が荒々しい
爪跡を残し秋が深ま
つて行きます。
私達の人生にも度
々難風あり、貧苦し
の難かしさに遭遇し
悩み、生きる事
に悩みます。



私達の浄土真宗の開祖
様は、阿彌陀如来の大慈悲に救われ
いのち終つたあと、さとりを開かせ
て頂き仏の正界、お浄土に仏國土に
生れさせて頂ける喜び、他力念仏を
教えて下さいました。
著述も数多く、ご法事の時必ずお
上げする和讃におうたの様な外
ご著書は大変な数になります。
引長二年十一月二十八日御齡九十
才にて往生されました。
明治九年十一月二十八日 明治天皇

は勅して「見真大師」と諡せられま
した。

報恩講は私達にお浄土、仏国土へ
の救いをお示し下さつたご恩、及び
の法要の日です。

しんらん様のご命日

新暦の一月廿八日 旧暦の十一

月廿八日 正忌と呼ぶ。

この本山の報恩講に先きがけつ十一
月におつとめする事から「お取越り

おとりこしり」とよばれます。

しんらん様のご苦勞、しんらん様

によつて私達が平等に救われる心の安

らぎご恩を思い、静かに浅間山、我

が身を反省し心から合掌念仏、なむ

あみだぶつを称えたいものです。

当寺では

十月廿一日（日）十一時

お勤め致します

終つて粗飯ご一緒

伝言板

○お盆、お中元に皆様よ

り、ご苦心の品定め色々よ

頂き衷心より感謝しつつ

つお仏前に、お名前ご

厚志を伝え合掌。

○六月恒例の寺旅行、樂

しい若返りの一泊でした。

翌朝、真赤な太陽を窓ごしの海上

に迎え、歓声を、元気に定刻帰還。

○疲れさせない飽きさせないの宮系

ご兄弟苦心のナラン、景尚、そし

て写真班の大関さん。有難うさん。

○七月のお盆法要は台風来で大あわ

ま、一日のばして往來ら四人出仕

・總代さんのお一人である星野様

、浅草仲見世に昔から「いせ勤」と

なうお店を出していられ、今おみ

せより、あのかわい、トヒヨツ子
のお菓子箱、大中小をトトラツク



にフンで、お檀家さんに差上げて
下さいと。頂いたお檀家さんビツ
クリシフと大抵でー。

○ 勿論、本尊様にお話しはお供。
数日後又にお盆の来客にと。

○ お盆を迎え、本尊様前のキラキ
ラのおおらくのおみぎ依頼、本堂
前階段、内造の参道、墓地内のコ
ケとり掃除、次から次へと仕事

○ 方が、近所の方も内々に入ると
つい深呼吸です。

○ 本山からは責任役員さん、総代さ
ん方のご印と頂いたの書類届け、
色々なご依頼状、頭痛です。

○ 年長の孫や副坊守が一生懸命、各
舎合や書類への援助をしてくれま
すので、いきもいきもつげます。

○ 処で等々にやわらか味を出したい
と愚考、こうしたいと孫の創に相
談、あちこち見て廻つて貰い、表
紙に色付きの画を実現出来ました。

○ ただ黒一式と違い一枚が高価にな
るので表紙のみ。

○ 近頃とみに聴力、視力が弱くなり
右目上半分はアオソコヒ、左目は
白シコヒを手術して貰った先生に
術名のヨゴレ？を光線をかけるとキ
レイにヒ。だが光線のかけすぎ。

○ 他の大学病院で受診、貴男の左
目は物がうつる大事耳を焼いて
しまし直りませんよ、エッ！エッ！
そんな事で今残つてる右目のわず
か視力を大事にするしかありません、
と、ギョツ！でした。

○ 94才、まだまだ色々はものに興味レ
んせん、頑張ります。

○ たゞ真すぐを右ならべで書いてる
つもりが横にそれたり上下つまつ
てしまつたり読みにくい事でしょう
が、勘弁下さい。修正液、修正液。

○ 坊守も腰やら足にベタベタ湿布や
ら鎮痛剤を、負傷兵ニ人です。